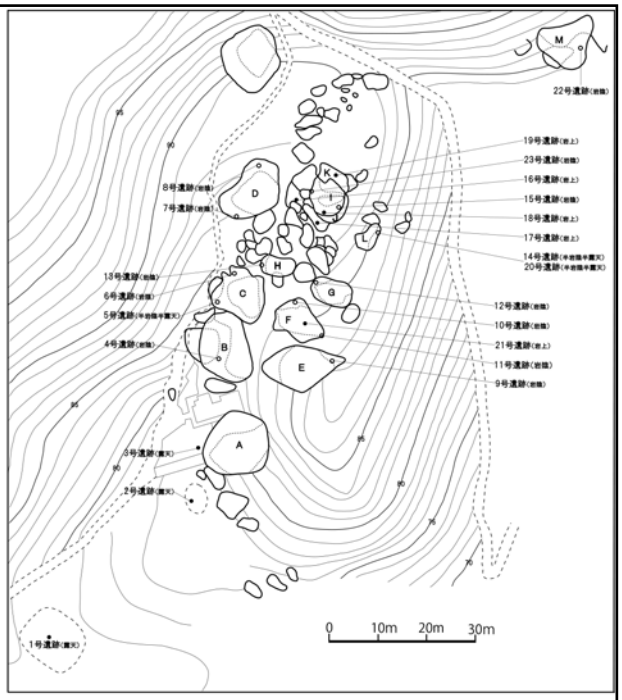
宗像・沖ノ島祭祀の実像

―宗像沖ノ島祭祀遺跡と祭具・祭式との比較から―

笹生　衛

1.はじめに

- 宗像・沖ノ島の祭祀遺跡→４世紀後半～９世紀代の神祭りの跡。
- 祭祀の形＝４段階で変遷。「岩上祭祀」（４世紀後半から５世紀）→巨岩のもとの「岩陰祭祀」へ。
- 巨岩から少し離れた「半岩陰・半露天祭祀」（７世紀後半から８世紀）→巨岩から離れた「露天祭祀」（８・９世紀）。
- 祭祀で捧げ使用した品々が出土した場所＝祭祀の場との前提。
- →そう考えてよいのか。また、いかに神を祀ったのか、祭祀の実態は不明。
- 神の考え方（神観）と祭祀の構成「祭式」から、宗像・沖ノ島祭祀遺跡の古代祭祀の実像を考える。



第1図　沖ノ島祭祀遺跡全体図(報告書『宗像沖ノ島』(1979)から作成)

2.古代の神観と祭祀の意味

- 人々は、なぜ神を信じ祭祀を行うのか。
- 人間は、特定の現象の背後に、起こし司る「行為者（Agents）」を直観的に感じ、自らの姿や性格と同じように人格化。
- →人間の脳の認知機能に由来する自然な反応。
- 特定の現象が現われる環境・場所＝働きを起こし司る神が居られると直観。→古代の「坐す（ます）神」の神観。
- →『延喜式』祝詞で水源の山で水を恵む「水分（みくまり）に坐す皇神（すめがみ）」「山の口に坐す皇神」は典型例。
- 『記紀』が伝える沖ノ島（沖津宮）、大島（中津宮）、釣川河口の海浜（辺津宮）に坐す宗像三女神も同様。
- 玄界灘の自然環境の働き、海上にでる霧や激しい潮流の動きにもとづく神名「タゴリヒメ（タギリヒメ）・タギツヒメ」、玄界灘のただ中で真水が湧く神聖な島の女神を意味する「イツキシマヒメ」。

出雲国意宇川の水源の熊野山、『出雲国風土記』で熊野大神の社がますとされる。

タゴリヒメノミコト（タギリヒメノミコト）（沖津宮）がます宗像・沖ノ島。

祭祀の意味

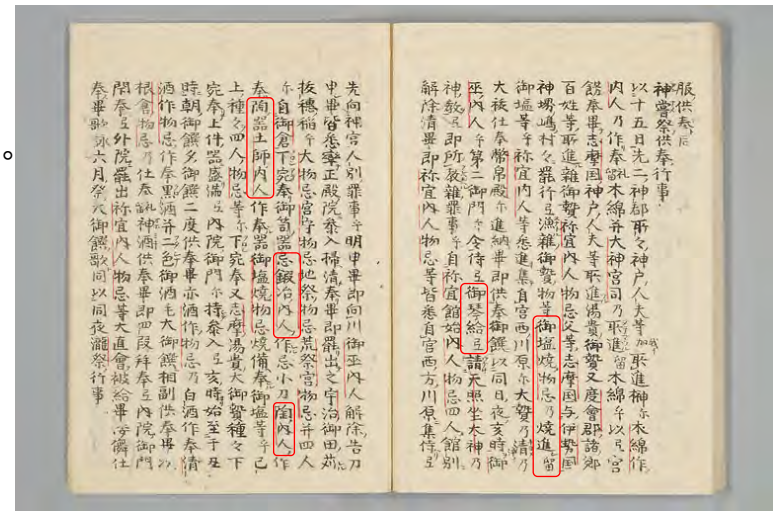
- 祭祀の基本的な形＝神が坐す（居られる）場所で、自らが貴重とする品々、美味しいと感じる酒食を供え、人々が望む神の働きを願う。
- →神は返礼として、それを聞き入れ叶えてくれると直観。
- 脳の認知機能。→神は人間と同じ姿・性格を持つと考える。→神と人間の関係にも何かを提供すれば、何かが返されるとの人間関係の直観。
- 一方で、神の意に沿わぬ非礼な行為、穢れた品や酒食を捧げ供えれば、
- →怒り祟るという危険への直観も同時に働く。
- だから、非礼とならぬため、祭祀には厳重な潔斎と厳格な作法・祭式の遵守が必要。
- 古代の神祇祭祀に伴う潔斎・祓と、細かな祭式の規定は、これに対応。

京都、石清水八幡宮、石清水祭の献饌

石清水祭、高良社への朝御饌奉献

3.古代の祭式と『皇太神宮儀式帳』

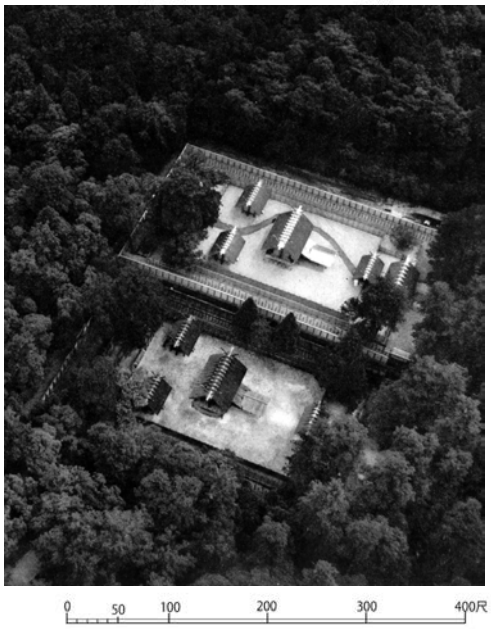
- 延暦23年（804）に成立した『皇太神宮儀式帳』→８世紀代の神宮祭祀の実態を伝える。
- 古代の祭式がわかる唯一の史料。
- その年代は、宗像・沖ノ島祭祀遺跡の５号遺跡（半岩陰・半露天祭祀）、１号遺跡（露天祭祀）と重なる。
- 神宮の古代祭式を整理し、古墳時代の祭祀遺跡などと比較。
- →その歴史性や祭祀としての普遍性について検証。



『皇太神宮儀式帳』写本（國學院大學図書館）
外宮一禰宜を務めた村松家行の蔵本を、文和三年(1354)に権禰宜度会実相が書写した写本の系統の一つ。

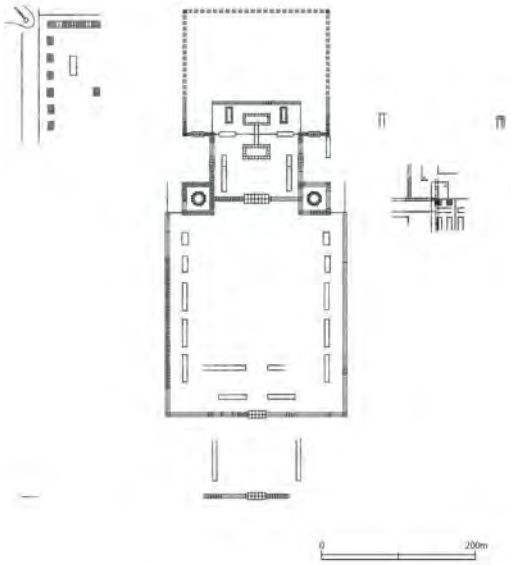
祭祀の場

- 祭祀の場となる神宮内宮の建物と施設の配置。
- ①御形（みかた・神を象徴するもの）の宝鏡を奉安し、神宝・幣帛を収納する高床倉構造の「正殿」「東・西宝殿」を板垣（瑞垣）で区画・遮蔽して大宮院（内院）の中核とする。
- ②その南に儀礼空間の「第三重」が位置し、そこには斎王と女孺（にょじゅ）の侍殿が建つ。
- ③建物配置は、南北の中心軸上に正殿を置き、東・西宝殿、侍殿等は東西にシンメトリーに配置、五重の板垣で区画・遮蔽される。
- ④垣内への出入り口は、主に中心軸上に設けられた門〈於葺御門（うえふくごもん）、於不葺御門（うえふかざるごもん）＝鳥居の原形〉となる。外と接する門の前には蕃垣が立つ。

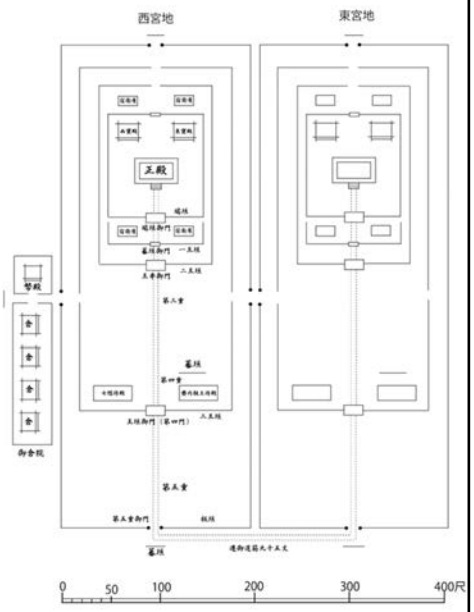


皇太神宮大宮院周辺推定図
主に『皇太神宮儀式帳』による。

- ②から④までの建物配置と儀礼空間の特徴。
- 『日本書紀』白雉３年（652）完成の難波長柄豊碕宮（前期難波宮）に対応させた形。
- →７世紀中頃、倭国が律令国家へと転換する過程で整備された結果。

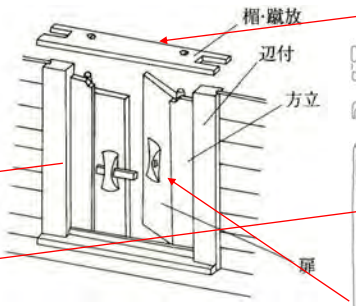


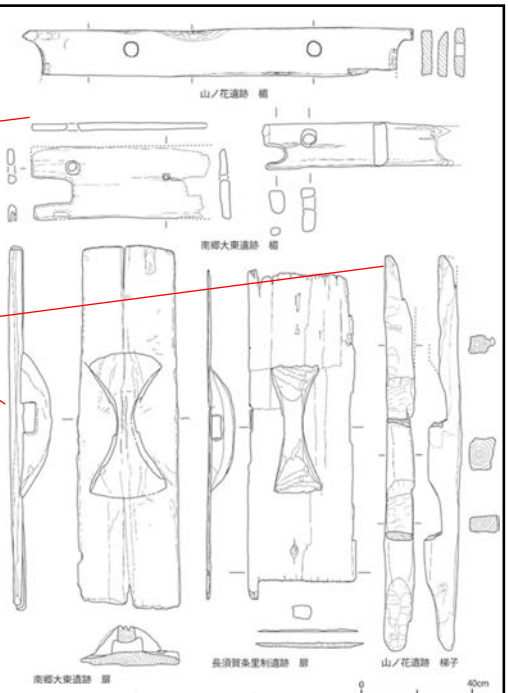
前期難波宮　建物配置



皇太神宮大宮院　建物配置

祭祀の場の高床倉



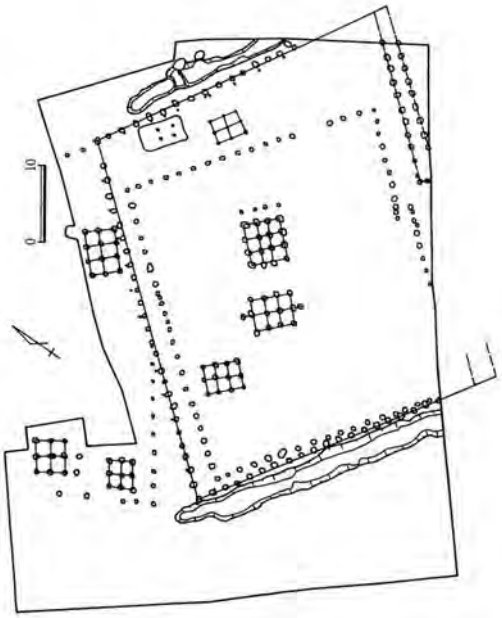


５世紀代の祭祀遺跡出土の高床部材

- ①の高床倉と区画・遮蔽施設については、古墳時代の祭祀遺跡で確認できる要素。
- ５世紀から７世紀代の複数の祭祀遺跡で、閂穴付きの扉材と楣（まぐさ、扉を装着する部材）、梯子材といった部材が出土。
- 多くの祭祀の場には、高床建物、特に閂で扉を固定し封ができる高床倉が建っていた可能性。

祭祀の場と区画・遮蔽施設

- 高床建物を塀などで区画・遮蔽した遺跡。
- ＝奈良県御所市秋津遺跡（４世紀代）、の兵庫県神戸市松野遺跡（５世紀代）、群馬県渋川市金井下新田遺跡（５世紀末期～６世紀初頭）。→祭祀・儀礼と関連。
- 神や祭祀へと穢れなどの悪影響が及ばないようにする。
- 神霊の強い霊威が周囲へ悪影響を与えないようにする。
- 神を象徴する御形を奉安した高床倉を、塀・垣で区画・遮蔽。＝神宮の原形「神籬（ひもろき）」の実態。
- →古墳時代の４・５世紀以来の伝統をもち、古代祭祀に広く当てはまる要素。



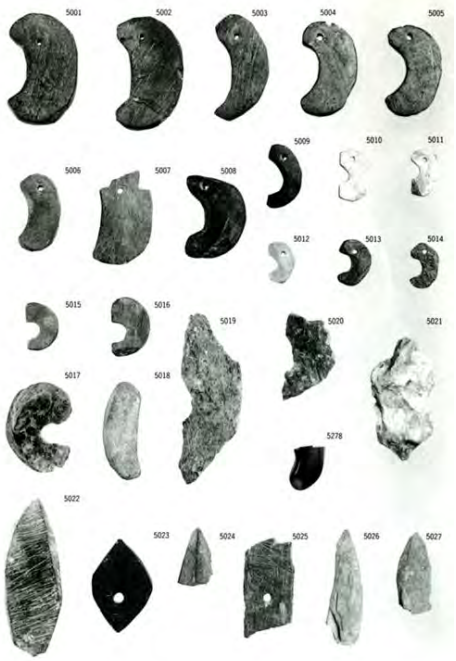
神戸市　松野遺跡　遺構図

祭祀の構成

- 『皇太神宮儀式帳』が記す、９世紀初頭当時の三節祭の祭式。
- ①「祭祀の準備」→祭祀で使う祭具や供献品の作成、御饌（神饌）の調理。
- 禰宜、土師器作物忌、御笥作内人、忌鍛冶内人、陶器作内人（すえものつくりのうちびと）などが、鍛冶、木工、土師器・須恵器の製作。養蚕と紡織を行い、大御饌（おおみけ）の調理具や供膳用の食器類など祭具、大神に捧げる神御衣を製作。
- ②「祭祀」→禰宜たちは御饌を持ち内院に入り正殿前に供え、拝と拍手の後に退出。
- 神嘗祭の翌日（９月17日）、斎王が参拝、朝廷の幣帛の供献。
- 忌部は第三重で幣帛と神馬を捧げる。勅使の中臣と大宮司は告刀（祝詞）を奏して、太玉串を捧げる。
- ③「祭祀後の対応」→三節祭で正殿前に供えた大御饌は、夜に夕大御饌を供えた後、未明に改めて朝大御饌が供える→禰宜たちの拝・拍手後の退出に伴い撤下された。
- 神嘗祭の翌日、第三重で捧げた朝廷の幣帛は正殿内へ、神馬の鞍（馬具）は正殿に隣接する東宝殿へ、それぞれ禰宜たちの手により納められる。

①「祭祀の準備」

- ５世紀以降の列島内各地の祭祀遺跡と共通する要素。
- →鍛冶、石製模造品の製作、紡織、調理に関係する遺物が出土。
- 祭祀遺跡を残した祭祀は、地元の人々の手により、神祭りの場の近くで準備された。
- 古代の神宮祭祀が、禰宜・内人・物忌など地元の祭祀者により、最終的に準備されたことと一致。
- この目的は、神のための品々を特別に製作し、その清浄性を確保するため。



愛媛県松前町　出作遺跡の石製模造品と未製品

②「祭祀」

- 神宮祭祀→地元で準備、調理・製作された神饌・神御衣を供え捧げる一方で、
- 朝廷から供与された「幣帛」を捧げる、二重構造。
- これも５世紀代の祭祀遺跡と共通する。
- →多くの祭祀遺跡からは、大和王権が集積・管理していたと考えられる鉄鋌、新しい技術で焼成された初期須恵器が出土。
- 神宮の第三重で大宮司、中臣・忌部氏による祝詞奏上、幣帛・神馬の奉献。
- 儀礼の形＝版位（へんい、宮廷儀礼で参加する官人の位置を示す）を使用。
- →神宮の建物配置が前期難波宮の配置にもとづき整備された７世紀中頃に導入。

千葉県木更津市千束台遺跡の鉄鋌

石清水祭　勅使（上卿・しょうけい）による御祭文奏上

③「祭祀後の対応」

- 夕・朝の大御饌は、神前へと放置されたのではなく撤下された。→大御饌の食器が特定の場所にまとめられた。
- ５世紀以降の祭祀遺跡→多くの場合、土器類などの集積遺構→祭具・食器類が、最終的にまとめられた状態と一致。
- 神宝類、幣帛や神馬の馬具など、貴重な御料、奉献品を高床倉構造の正殿や宝殿へと収納。
- ５世紀以来、複数の祭祀の場に存在した高床建物（高床倉）に対応。

神宮祭祀と古代祭祀の共通性

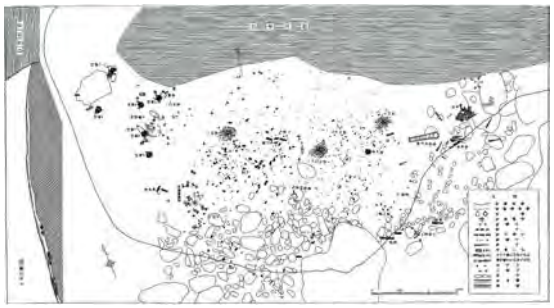
- 神宮の三節祭の祭式
- →第三重での儀礼＝７世紀中頃から後半、宮廷儀礼の影響を受けた新たな要素。
- その他は多くが５世紀以来の古い系譜をひく伝統的な要素。
- 伝統的な要素→地元の祭祀者が主体的に係わる大御饌を供える部分と、朝廷から供与される幣帛を捧げる部分の二重構造。
- **※神宮の特有なものではなく、日本列島の各地で行われた５世紀以来の古代祭祀が共有する要素。**

神宮の正殿と東宝殿（『日本神道史』吉川弘文館より）

４．宗像・沖ノ島祭祀の復元

- 沖ノ島祭祀遺跡の各段階の祭祀で共通した状況。
- →特定の場所に奉献品と考えられる遺物が、まとめられた状態で出土。
- 岩上祭祀の17号遺跡（４世紀後半）→I号巨岩の隙間に銅鏡・刀剣・石製腕輪などが、まとめられ差し込まれた状態で出土。
- 岩陰祭祀の７号遺跡（６世紀）→D号巨岩の岩陰に馬具、胡籙、弓矢、倭系飾り大刀・剣、鉾、盾、挂甲などが整然と並べられていた。
- いずれも祭祀を行うには狭い場所→出土品は、捧げた品々を祭祀後にまとめ納めた状況と考える方が理解しやすい。
- 捧げた貴重な品々を収納＝５世紀以降の祭祀の場に建っていた高床倉の存在に対応。

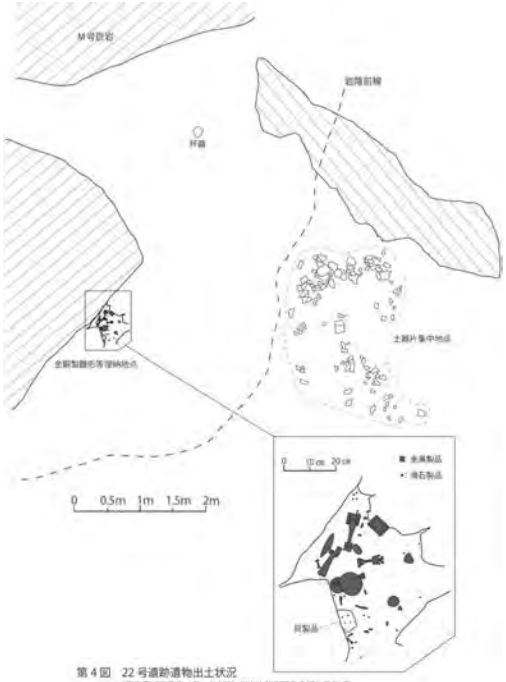
17号遺跡の遺物出土状況



７号遺跡の遺物出土状況

巨岩へ納めた神宝

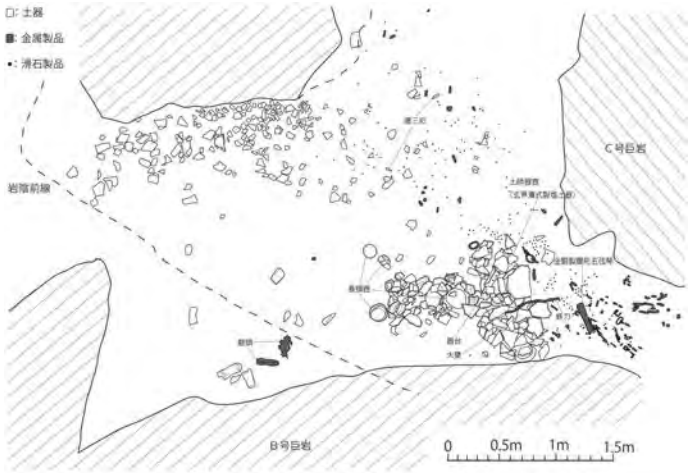
- 岩陰祭祀の22号遺跡（７世紀）→M号巨岩の岩陰に石で囲みを作り、そこから金銅製雛形の紡織具や高杯・壺などがまとまって出土。
- 半岩陰・半露天祭祀の５号遺跡（７世紀後半～８世紀）→Ｂ号・Ｃ号巨岩の隙間、奥まった部分から鉄刀、金銅製雛形の琴、紡織具、高杯・壺がまとまって出土。
- 神宮の神宝と共通する刀剣、紡織具、琴は、巨岩のもとへ納めるという意志を示す。
- 沖ノ島祭祀遺跡の巨岩群＝沖ノ島に坐す神を象徴する「御形（みかた）」
- →そこへ神宮の神宝と共通する品々が納められた。
- 神へと捧げた貴重な品々は、最終的に神を象徴する御形の近くへ納められた。神宮祭祀と共通。



第４図　22号遺跡遺物出土状況
（報告書「宗像沖ノ島」（1979）の出土状況図を合成して作成）

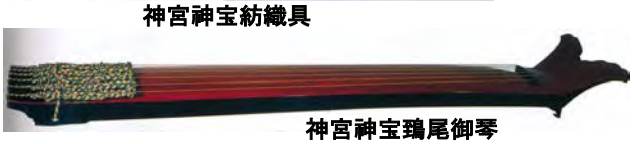
５号遺跡遺物出土状況

1・５・22号遺跡出土
金銅製紡織具模造品



第３図　５号遺跡遺物出土状況（報告書『宗像沖ノ島』(1979) の出土状況図を合成して作成）

神宮神宝紡織具



神宮神宝鵄尾御琴

５号遺跡出土
金銅製琴模造品

祭祀と土器生産

- 沖ノ島祭祀の土器→圧倒的に須恵器が多数。
- これは、７世紀後半頃から始まる５号遺跡や、近い年代の22号遺跡で明確化。
- 須恵器は、特殊な鉢・有孔土器といった祭祀用の器種を含む。
- 特定の須恵器の工人が祭祀用に作った土器が、沖ノ島の祭祀の場で使われていた。
- →神宮の古代祭祀で、大御饌を供える須恵器・土師器を、陶器作内人と土師器作物忌が作ることと一致。
- 神宮の土師器作物忌の土器製作の伝統＝明和町北野遺跡の土器生産遺構から６世紀まで遡る。
- 宗像・沖ノ島祭祀→祭祀用の須恵器を生産し祭祀の場へと供給する体制は、５号遺跡が始まる７世紀後半頃に確立。

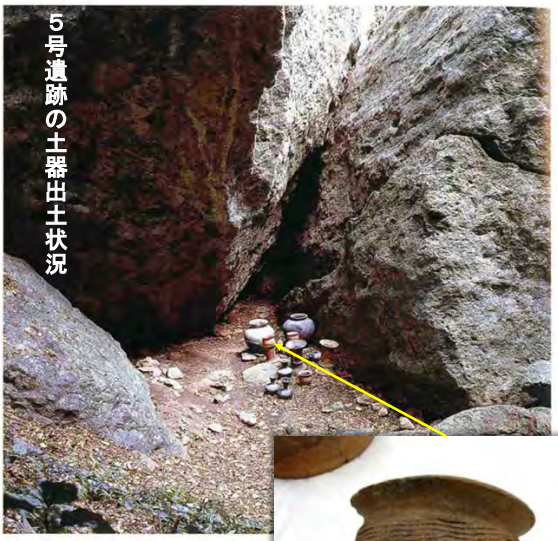
1号遺跡の現状

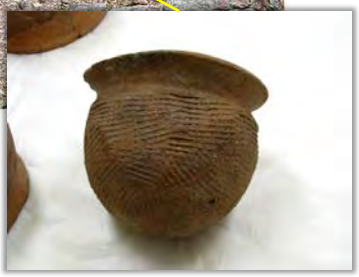
20号遺跡有孔土器

1号遺跡有孔土器

祭祀と製塩

- 半岩陰・半露天祭祀の５号遺跡と露天祭祀の１号遺跡からは、玄界灘式の製塩土器が出土。
- →地元の製塩の場から、直接、塩が沖ノ島祭祀の場に持ち込まれてた。
- →神宮の月次祭などの大御饌には、地元の御盬焼物忌（みさきものいみ）が特別に焼いた塩がそえられる。これと一致。
- **※７世紀後半を画期として、神宝・祭具だけでなく、土器・塩の供給といった祭祀の準備の形まで、宗像・沖ノ島祭祀は神宮祭祀との共通性を高めた。**





１号遺跡出土の玄界灘式製塩土器

祭具・土器の撤下・集積

- 神宮祭祀と沖ノ島祭祀に多くの共通点。
- →宗像・沖ノ島の女神に供えた神饌（食膳）も神宮と同様、祭祀の後に撤下。
- 撤下した土器は一定の場所へとまとめて集積。→露天祭祀の１号遺跡。
- 1号遺跡＝多量の土器と石製模造品や金属製雛形などが混在して出土。
- ５号・22号遺跡と同時代か続く年代の祭祀で供えた土器類、交換・廃棄された祭具類を集積した結果、形成された遺跡。
- 神を象徴する巨岩群を仰ぎ、一定の広さが確保できる。＝神宮の第三重のような祭祀の場として機能した時期もあった可能性。

１号遺跡の立地と遺物出土状況

沖ノ島祭祀の祭式

- 神宮の古代祭祀と古代の宗像祭祀との共通性。
- 宗像・沖ノ島の古代祭祀は、「祭祀の準備」・「祭祀」・「祭祀後の対応」の三段階からなる古代祭祀の基本的な祭式で行われた。
- 古代の沖ノ島祭祀では、神の御形の巨岩群を仰ぎ、一定の広さが確保できる場所での祭祀で奉献品を捧げ、
- その後、貴重な奉献品は宗像氏などにつながる地元の祭祀氏族の人々の手で、神の御形の巨岩群へ持ち込まれ納められた。
- 巨岩群からの出土品の多くは、このように残された可能性。
- 巨岩群から距離を隔てた正三位社前遺跡＝鉄素材の鉄鋌がまとまって出土→５世紀代の「祭祀の準備」と関係する遺跡か。

正三位社前遺跡出土の鉄鋌

５．まとめ－国家形成と『記紀』神話との関連－

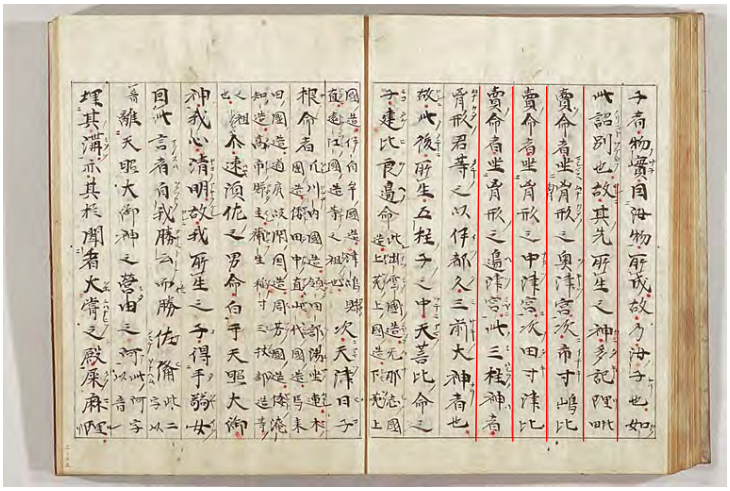
- ４世紀後半以来の歴史をもつ宗像・沖ノ島祭祀。その祭式を考える上で大きな画期となるのが７世紀後半。
- ７世紀中頃、皇祖神を祀ってきた「神籬」は、前期難波宮の建物配置にならい「神宮」へと編成。
- 650年代から660年代には出雲の神と香島（鹿島）の神の祭祀の場は「神宮」として整備。
- いずれも、神宮とともに神郡が設置され、国家的に重要とされた神々。
- 宗像の神々にも神郡の宗像郡が置かれている。
- ５号・22号遺跡からうかがえる７世紀後半頃の祭祀体制の整備→同じ歴史的な背景で行われた。

出雲大社

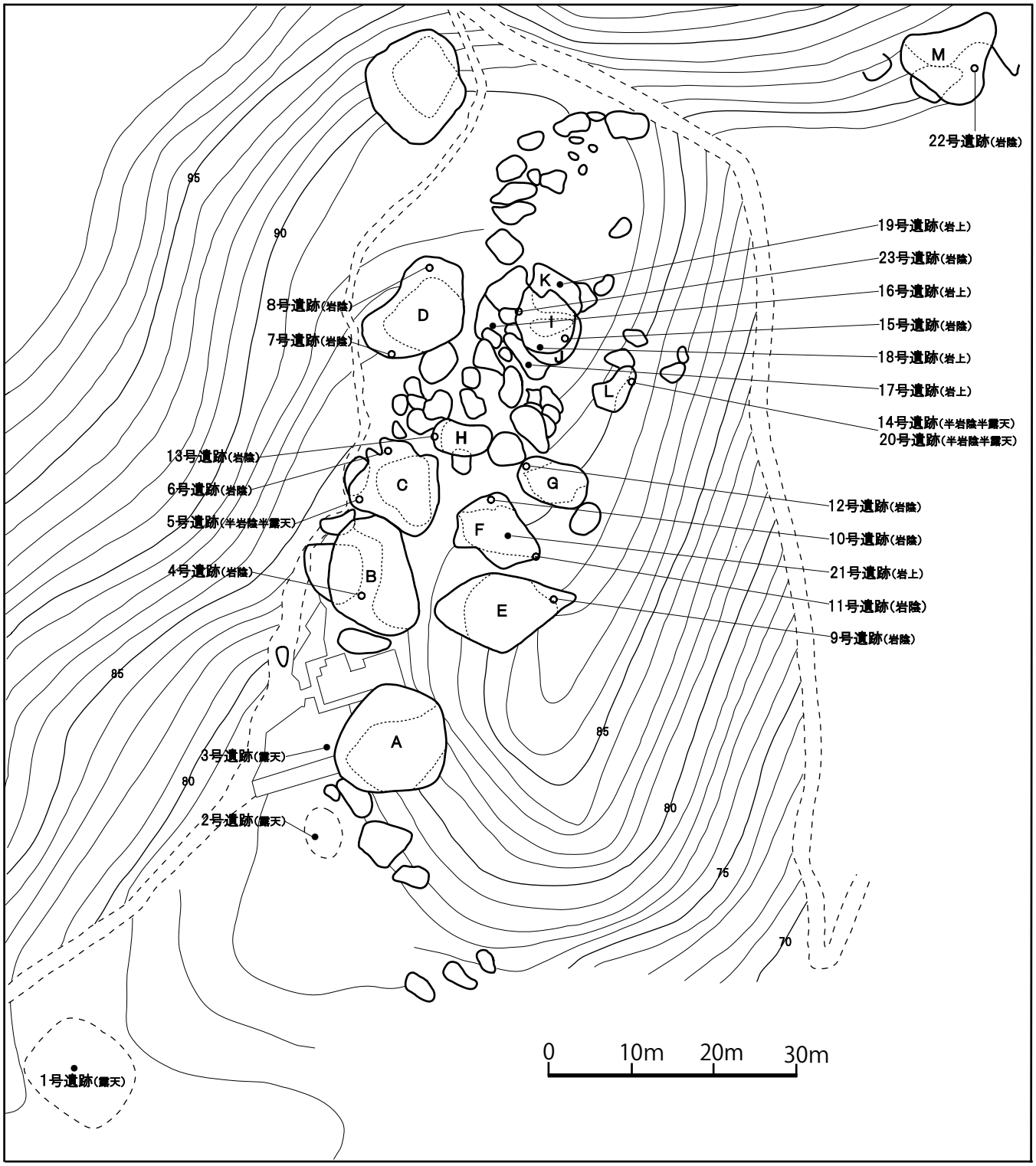
鹿島神宮

国家形成と『記紀』神話との関連

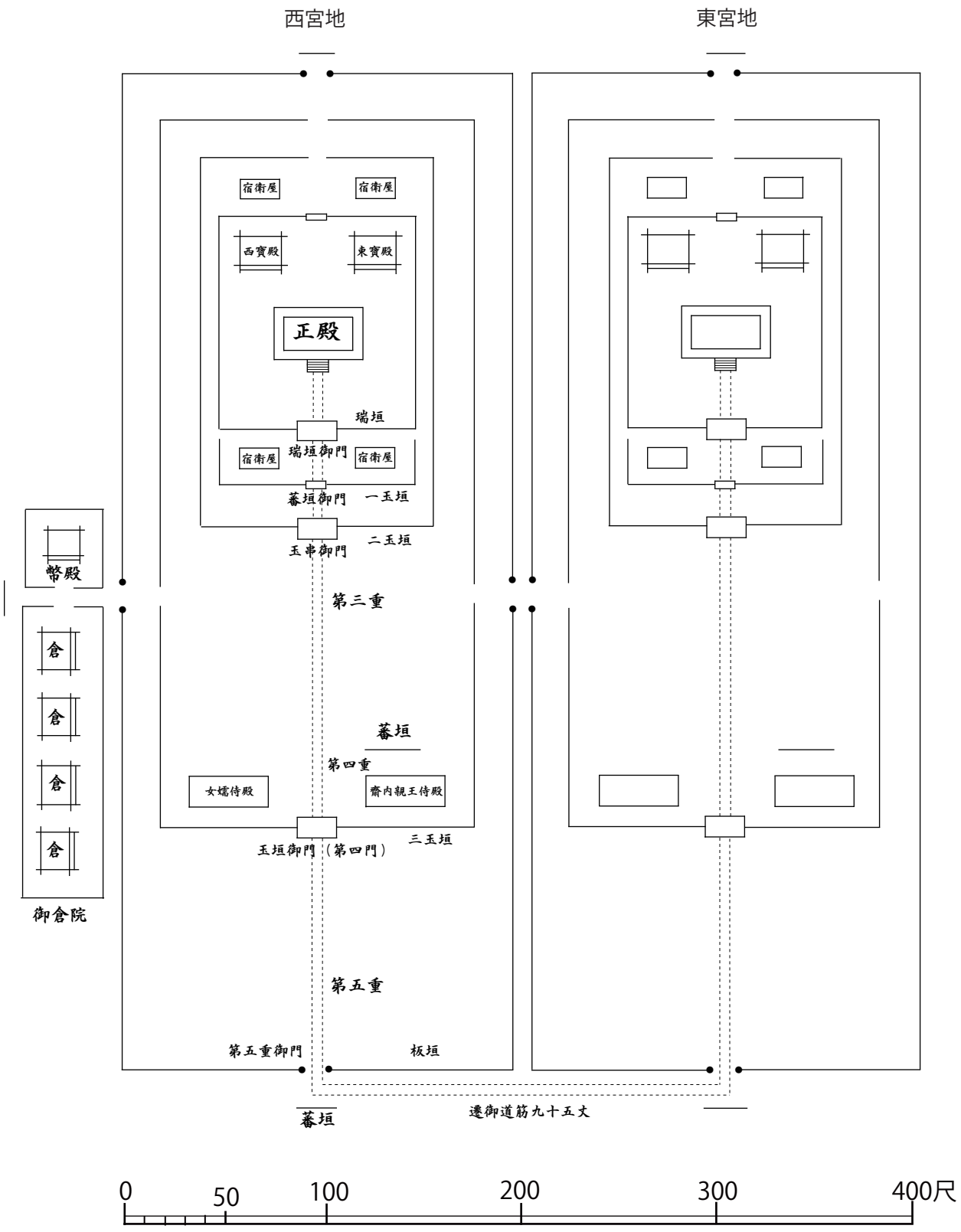
- ７世紀中頃～後半＝古代国家の形成期。
- 倭国から律令国家「日本」へ。
- 大王から「天皇」へ。
- この過程で、皇祖神と列島内の主要な神々の祭祀は整備され、
- その神々の物語は、７世紀後半に編纂が始まった『記紀』神話の中核部分として位置づけられた。
- 宗像三女神と宗像・沖ノ島祭祀も、その一つ。
- 沖ノ島の古代祭祀は、日本の国家形成のプロセスと密接に関係していた。



梵舜本『古事記』（國學院大學図書館）
卜部兼右の子、梵舜が室町時代後期に書写。卜部吉田家に伝えられた『古事記』古写本。

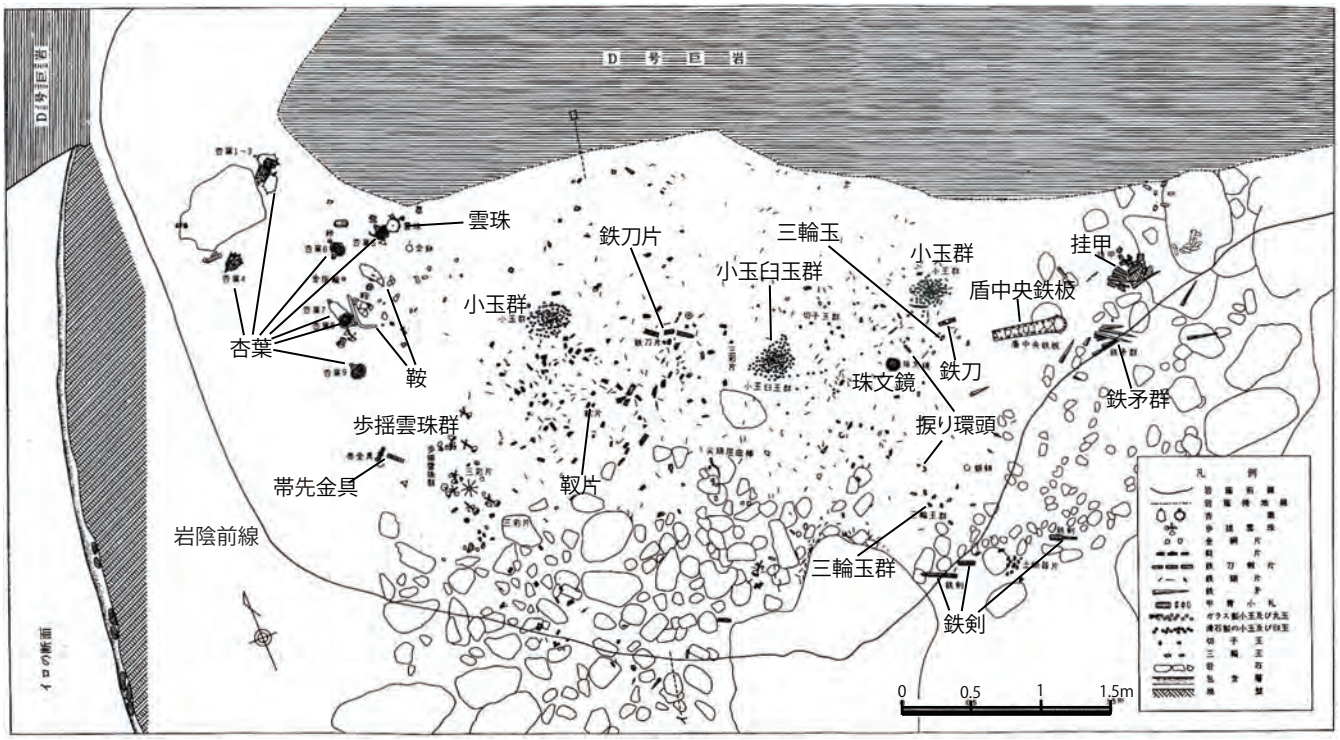


第1図　沖ノ島祭祀遺跡全体図〔報告書『宗像沖ノ島』(1979)から作成〕

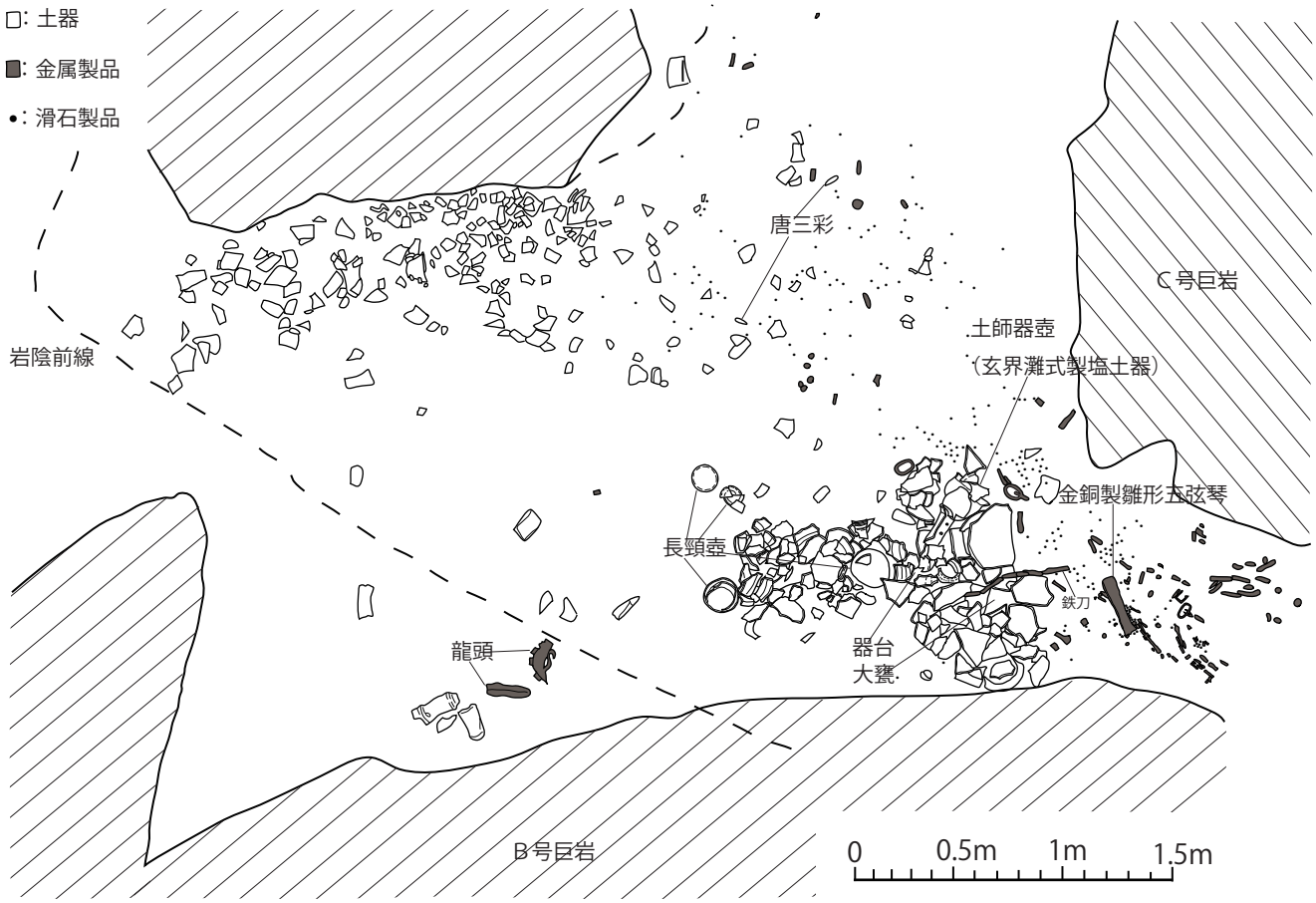


第２図　皇太神宮大宮院建物・垣配置推定図

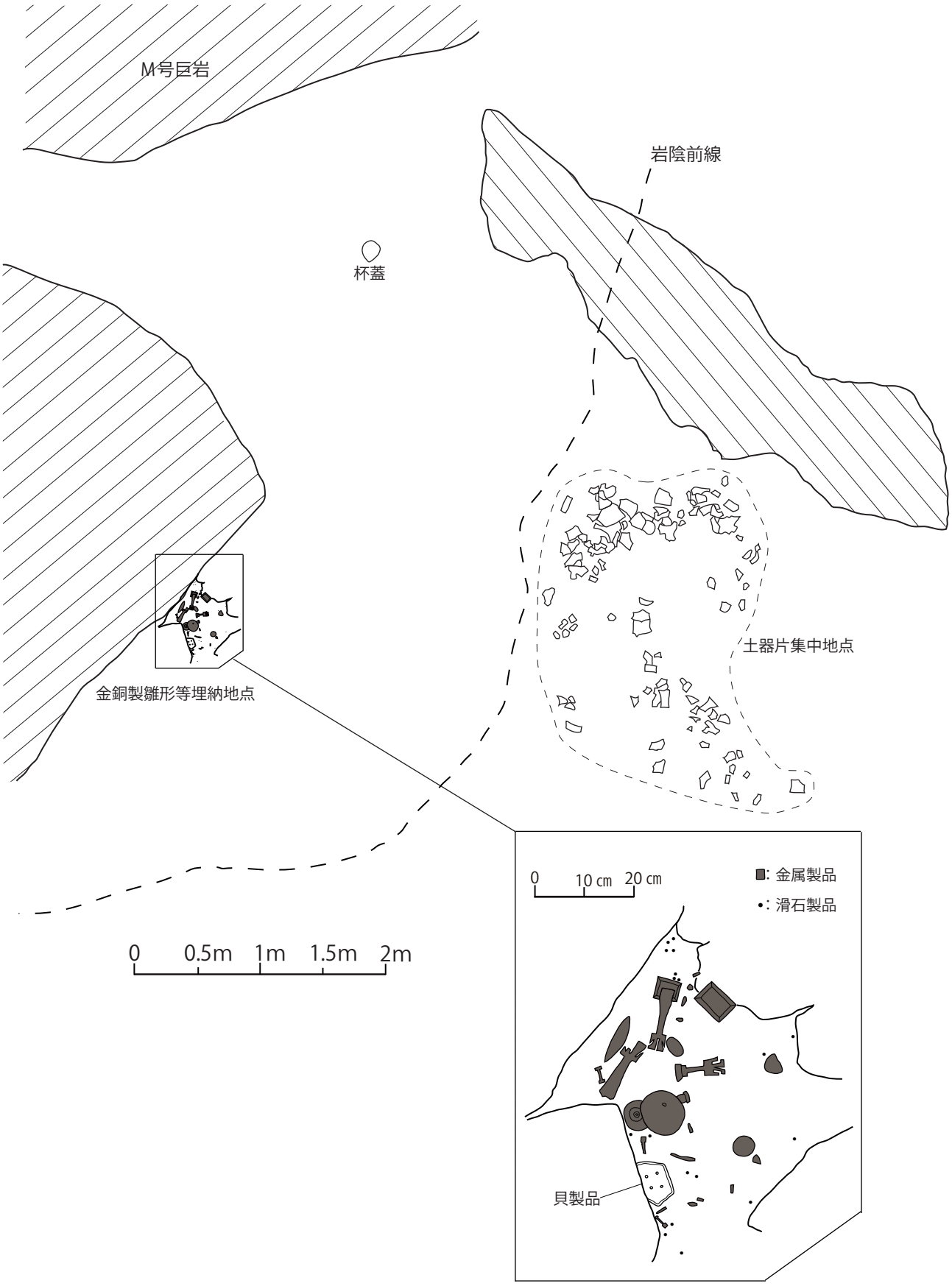
（『皇太神宮儀式帳』による。福山敏男『神宮の建築に関する史的調査』）



第3図　7号遺跡遺物出土状況〔報告書『沖ノ島　宗像神社沖津宮祭祀遺跡』(1958)に加筆〕



第４図　５号遺跡遺物出土状況　〔報告書『宗像沖ノ島』（1979）の出土状況図を合成して作成〕



第 5 図　22 号遺跡遺物出土状況 〔報告書『宗像沖ノ島』（1979）の出土状況図を合成して作成〕